

錫杖

歓喜院には、鑄造のフィニアル、錫杖（サンスクリット語でカツカラ）が祭られています。この錫杖は金属の輪で、中央に聖天（歓喜天）の像が納められています。ヒンドゥー教の神ガネーシャの仏教版、聖天は、抱擁している象頭人身の双身像として描かれています。その神聖な姿から、妻沼聖天山歓喜院本殿の内宮に納められており、一般には公開されていません。ただし、歓喜院創設記念日などの特別な機会には一般展示されています。

錫杖は木製の杖で、鑄造金属で造られた頭部の輪形に遊環（ゆかん）が通してあり、先はとがっています。錫杖を振るとその輪っかがシャクシャクと音を出し、お経に合わせて振られることもあります。昔は、僧が遍歴の際に携帯し、動物を追い払ったり、害獣や襲撃者から身を守ったりする際に使われることもありました。

御正躰錫杖頭は、歓喜院を創設した武将、斎藤別当実盛（1111～1183 年）の外甥と 2 人の孫により、1197 年に歓喜院に寄進されました。錫杖の寄進は、本殿の改修を記念するためのものでした。御正躰錫杖頭は、国指定重要文化財です。